アルケイア―記録・情報・歴史―
第七号　二〇一三年三月　二五―七一頁
南山大学史料室

”建築資料“とはなにか
―自律分散システムによる建築アーカイブズの展望とその意義―

本橋　仁
早稲田大学大学院創造理工学研究科
建築学専攻博士課程

What to Call an Architectural Document: Significance and Foresight of Architectural Archives by Autonomous Distributed System

Department of Architecture, Graduate School of Science and Engineering,
Waseda University
MOTOHASHI Jin

archeia: documents, information and history
No.7 March, 2013 pp.25-71
Nanzan University Archives

一　建築資料保存の機運

資料の評価は誰がするのか　ひしめくデジタルアーカイブズ　情報爆発とビッグデータ

問題提起

二　建築アーカイブズの現状

昭和末期の建築博物館基本構想　建築雑誌二年間の連載「建築博物館がほしい」

これまでの建築アーカイブズ　岡田信一郎・岡田捷五郎建築設計原図集成

JIA-KIT 建築アーカイヴス

三　ちいさなアーカイブズ

武田家アーカイブズ　資料の価値付けは誰がするのか

四　自律分散システムによる建築アーカイブズの可能性

自律分散システムとは何か　アーカイブズへの適用　異種のデータベースを統合する

Linked Open Data

五　異種のデータが組み合わさる

1　新聞記事を利用した Jubiläumsausstellung（1897）の復元

方法　新聞分析　新聞記事からの情報抽出　情報の整理と蓄積

2　映像資料の建築資料的価値の抽出

NHK 教育「テレビの旅」を事例として　NHK 教育「テレビの旅」　制作者側の意図

「テレビの旅」活用調査1 横浜市金沢区の元漁港調査　調査地1 漁師たちのゴルフ場

調査地2 漁村・生麦　調査地3 富岡町の漁港　「テレビの旅」活用調査2 耐災住居

六　まとめ

”建築資料“とはなにか
―自律分散システムによる建築アーカイブズの展望とその意義―

本橋　仁

一　建築資料保存の機運

二〇一三年一月、日本ではじめて、国立の建築アーカイブズである「国立近現代建築資料館」が設立される。[1]これまでも、大学や民間組織により、著名な建築家の図面資料の保存は進められていた。しかし、文化庁の事業として、資料館設立が実現したのは、日本の近現代建築が社会的な評価を得ることができたからである。また、その設計資料に対しても芸術的な価値が認められた証ともいえる。こうした、日本の近現代建築の再評価は、国外から起こり始めた。特に、一九七〇年代に世界を圧倒させた「メタボリズム運動」[2]は評価が高い。二〇一一年に森美術館で開催された「メタボリズムの未来都市展」[3]は記憶に新しい。資料の再評価は同時に、海外への資料流出を引き起こした。資料館設立の背景には、こうした流出に対する措置がある。その点で、日本の建築アーカイブズは、世界の後手に回ってしまった点も指摘できる。

建築資料の特徴のひとつに、資料形態、また大きさに多様性がみられることが挙げられる。建築資料と聞いて、

写真1　2012年夏、東京の渋谷ヒカリエにて「石井修図面展」（新建築住宅特集連載「家をつくる図面」連動企画）を開催した。建築図面を主役にし、その再評価を目論見としていた。筆者は展示計画を担当。

まず思い浮かべるものは「図面」であろう。他には、写真・映像・模型、そして建築物そのものが、建築資料として考えられる。さらには、図面においても、建築家が最初に作成する「基本図面」、施工時に作成する「施工図面」、また他にも「構造図面」「設備図面」と、その内容は多岐にわたる。

資料の評価は誰がするのか

上述のように建築資料の定義は広い。さらに建築アーカイブズの設立が遅れてしまった原因に、資料の評価方法が、未だ研究段階にある点が挙げられる。本来、建築の図面は建築物を建てる目的のもと、その必要のために作成される。建築が竣工すれば非現用資料となってしまう資料である。しかし、特に近年は図面がCAD[4]により作成されることにより、手描きの図面に対して、美的価値が認められるようになってきた。こうした点が、一般的な文書のアーカイブズとも、また絵画とも大きく異なる点であろ

う。こうして、建築資料としての明瞭な定義付けが成されないまま、図面は資料館へ、建築は野外博物館へと、資料の形態ごとに管理せざるを得なかった。

ひしめくデジタルアーカイブズ

一方、一般的なアーカイブズの動向は、どうであろうか。昨今、デジタルアーカイブズと名のつくサイトをよく目にするようになった。著作権の切れた明治期の文献や、各地の古写真、航空写真、はたまた海外においては死海文書に至るまで、貴重な資料がネットを通じて、だれでも簡単に見ることができるようになった。こうしたアーカイブズは、多数公開されはじめたものの、個別のアーカイブズであるために、横断的な検索をすることが出来ない。そのために、利用者にはある程度の、情報リテラシーが求められる。そのため、非常に簡単に閲覧はできるものの、誰しもにとって手軽なものにまでは至っていない。

情報爆発とビッグデータ

ウェブ上には、アーカイブズに限らず、ほんとうに多くの情報があふれている。情報爆発の様相を呈している。こうした状況にたいして、情報学の世界では、情報を整理・統合させようとする動きも出てきた。また、ペタバイト級のデータを取り扱う「ビッグデータ」[5]の導入が、多くの企業で進みつつある。これは、現在アーカイブズとは、無関係な世界で起こりつつある状況ではあるが、十分転用可能な技術である。

問題提起

石材を、木材を、セメントを工事にうつして、家屋や宮殿をつくる。これは建設である。知性の働きだ。
しかし、突然、私の心をとらえ、私によいことをしてくれ、私は幸福となり、これは美しいといったとしたら、
これは建築である。芸術はここにある。

「建築Ⅰ」『建築をめざして』より[6]

これは、近代建築の巨匠　ル・コルビジェ（Le Corbusier, 1887-1965）がのこした言葉である。「建築」をうまく言い表している一文である。建築がなんであるか、それは個人の価値観にもおおきく左右されるものだ。次節より、建築資料保存の現在から、筆者の考える建築アーカイブズのすすむべき方向を述べる。また、それに併せて、これまで筆者が取り組んできたアーカイブズへの取り組みを紹介する。ただし、この「価値観の違い」とアーカイブズを検討する点においては、アーカイブズ全般に対する提言でもあると考えている。

二　建築アーカイブズの現状

昭和末期の建築博物館基本構想

日本で「建築資料」の保存にかんする、本格的な協議がされはじめたのは、昭和も終わる昭和六〇年頃、建築学会で検討された「建築博物館基本構想」が契機と考えられる。これは、社団法人日本建築学会の創立百周年記念事業の一環として推進された。そして、昭和六一年八月には「建築博物館設立要望書[7]」が、当時の会長芦原義信氏の名前で、大蔵大臣 宮沢喜一氏・文部大臣 藤尾正行氏・衆参両院文教委員会委員長 愛知和男氏・文化庁長官 三浦朱

門氏に提出された。この要望書において、建築資料を保存する意義を「建築はそれに結実している広範な学術・技術・芸術の総合的な成果をもって、それぞれの時代の歴史を具体的にもっとも雄弁に物語る貴重な文化遺産であります。[8]」と述べている。また建設する博物館には、収集・研究・展示の機能のほか、関連諸施設との連携を図ることも考えられており、その日本における中心的存在に位置づけようとしていた。

本構想で興味深いのは、施設としての利用が検討されていた建築物である。建築博物館の計画にあたって組織された調査委員会は、世界における建築博物館の実態調査を行った。その調査報告では、ほとんどの建築博物館が、歴史的建造物を保存・修復し利用していたと述べられている。そのため、日本の建築博物館においても、既存建築物を利用すべきという方針がたてられた。その候補地が、設立要望書に明記されている。候補地として設定されたのは「A. 横浜新港埠頭保税倉庫2棟」「B. 旧根岸競馬場」の二箇所である。Aの保税倉庫については、聞きなれない名称かも知れない。しかし、「横浜赤レンガ倉庫」といえば誰しも耳にしたことがあるだろう。今では多くの観光客が訪れる横浜赤レンガ倉庫も、要望書が提出された一九八六年当時においては、いまだ現在のような商業施設への耐震補強がされる以前であった。

このように、一時盛り上がりをみせた、この国立の建築博物館構想も一九九四年の報告書を最後に立ち消えてしまう。この理由について、中原まり氏は、その規模が大き過ぎ実現性に欠けた点を挙げている。[9]現在、東京の田町にある建築学会会館には建築資料の展示スペースが設けられている。これは、二〇〇三年に会館の高度利用化のなかで「博物館＋ギャラリー」として設置されたものである。

建築雑誌二年間の連載「建築博物館がほしい」

中原氏の記述は、二〇〇二年から建築学会の学会誌にて連載がスタートした「建築博物館が欲しい」の初号に掲載されたものである。この時期から、建築資料の保存が切実な問題となり、バブル期の建築博物館のハード面の印象がつよい構想から、アーカイブズのようなソフト面の重要性が訴えられ始めてきた。主な執筆者を、建築アーキヴィストである中原まり氏[10]とし、図面などの資料をどのように保管し、管理していくかを具体的に解説するものであった。そのため本連載は、建築資料の取り扱いに困っている個人事務所にたいして、資料保管の指南書として重要な役割を果たしたものと思われる。また、連載が二年目に入ると、毎号執筆者を変えるオムニバス形式となる。その執筆者となったのが、建築の各分野で活躍する実務者であった。この連載により、アーカイブズとは日常的には無縁の建築家達が、保管されるべき資料を語り合い、貴重な意見が残された。冒頭でも述べた、建築資料の多様性が、浮き彫りにされている。ここでは、その一部を紹介する。連載一八回目に掲載された高橋鷹志氏[11]は、副題として「小さな建築博物館 ― 家[12]」という記事を残した。その内容は、おおよそそれまで議論されてきたアーカイブズ論とは程遠い。それは、住宅に残された、空間体験による「生活の記憶」の重要性を述べた上で、「環境履歴書」として残してはどうか、そして老若男女からこの履歴書を集めコンクールを催し、それを保存していこうというものである。「建築博物館の裾野は広大である。[13]」という締めくくりの一文は、建築資料の幅広さを示唆するものである。この記事の重要な点は、一般に建築家という「作家」の記録として考えられがちなアーカイブズの対象を、建築物の有名性も問わず、建築を利用する人間の記録にまで拡張した点にある。少々乱暴にも思える漠然とした資料対象の設定は、しかしながら建築の総合性の観点からみると、看過できない論点といえる。歴史や環境、また個人の嗜好や経済事情に影響され、その後の長期間存在することを当初から意図されている建築の性格上、生活そのも

のの記録も建築アーカイブズにおける重要な一資料である。

これまでの建築アーカイブズ

前述のように、国立の建築アーカイブズ組織が2013年に設立される。しかし、民間や大学、図書館など、各組織では、積極的にアーカイブズが作成されてきた。

岡田信一郎・岡田捷五郎建築設計原図集成

国会図書館には、実は建築家の図面が収蔵されている。岡田信一郎（1883-1932）と、その弟捷五郎（1894-1976）の図面資料である。岡田信一郎は、大正から昭和のはじめにかけて活躍した建築家であり、代表作には、歌舞伎座（大正一四年）や明治生命館（昭和九年）などがある。歌舞伎座は、残念ながら取り壊され、現在建築家隈研吾の手により新歌舞伎座の建設が進められている（二〇一二年一二月現在）。これら、日本で今なお知られる数々の建築を残した作家の図面が、国会図書館に収められていることはあまり知られていない。その数は、三四九件分、図面の枚数にして九八五九枚と膨大な量である[14]。これらの図面は、すべてアパチュアカードに記録され、現在では誰でも閲覧することが可能である。しかし、国会図書館が所蔵する建築図面は、これらのみであり、特殊な事例である。これは、岡田捷五郎が国会図書館の設計者を決める設計競技の審査員であったことが、図書館に図面が収蔵される経緯となったようだ[15]。

JIA-KIT 建築アーカイヴス

現在、日本でもっとも先行した建築アーカイブズの取り組みをしているのは、金沢工業大学を拠点におく「JIA-KIT 建築アーカイヴス」である。この組織は、二〇〇七年に金沢工業大学（以下、KIT）と日本建築家協会（以下、JIA）により共同設立された民間の建築アーカイブズである。JIA は、主に会に所属する建築家、設計事務所に、アーカイブズの存在と意義の周知を行い、資料の収集を担当する。またKITは、アーカイブ施設の整備、資料整理・保存・研究・公開を行う。[16] KIT の担う役割からも分かるように、日本では立ち遅れている建築資料の保存方法を、研究する組織としての側面も持っている。また、展示スペースも併設され独自に展示を開催出来るだけでなく、学外に対して積極的な研究公開を行なっている。二〇一二年現在では、二〇名の建築家の図面が収蔵されている。[17]

こうした日本の各地での取組みが、昨今活発化している。また、シンポジウム等も開かれ[18]各アーカイブズ同士の交流も盛んになりつつある。こうした状況から、KIT では「日本の建築アーカイブズに適した系統的な資料組織法の構築に関する研究」[19]を二〇一二年三月に発表した。著者の研究内容と問題点を同じにするものであるため、その内容について紹介する。

本研究で特筆すべきは、アーカイブズの共有に対して、具体的

表1　日本の建築資料とその管理者（一部）

建築資料名	管理組織
岡田信一郎・岡田捷五郎建築設計原図集成	国立国会図書館
伊東忠太資料	建築学会
曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所設計資料	建築学会
山田守資料	建築学会
清家清資料	建築学会
宮脇檀資料	建築学会
JIA-KIT 建築アーカイヴス	JIA+KIT
村野藤吾先生建築設計図コレクション	京都工芸繊維大学
武田五一建築図面、藤井厚二建築図面	京都大学
ジョサイア・コンドル建築図面	京都大学
堀口捨己資料	明治大学
早稲田建築アーカイブズ（映像）	早稲田大学
西山夘三記念すまい・まちづくり文庫	ＮＰＯ西山記念文庫
ギャルリー・タイセイ	大成建設

な方法を提示している点にある。それは、KITのこれまでの活動を基盤とした説得力のある提案となっている。特にデータベースのフォーマットに関する内容が主となっており、海外の事例を参考としたデータベースの試作を行なっている。それを一旦運用した上で、その問題点と今後の課題を示している。

KITで行われたこの研究は、個々独立した建築アーカイブズを、統合へとシフトさせる方向性を示した点で意義深いものとかんがえる。本稿の目的とも、「アーカイブズの統合」という点では方向性を同じにする。一方で、これらは統合の対象とするアーカイブズが、図面・写真それぞれ単一の建築資料を対象としていること、またデータベースを作成できる整備された組織であることが前提とされている。本稿では、建築資料を対象とした具体的なこれらの研究を尊重しつつ、さらに建築外へも広がっていくアーカイブズの構想を述べたい。また組織的なアーカイブズだけではなく、地方の郷土資料や個人活動の“ちいさな”アーカイブズまでを射程として捉えてみたい。

本稿における提案は、研究としては現実性に欠けると受け止められる向きもあろう。しかし本稿では、具体的事例を通して、その意義を述べたい。これから述べる内容は、空理空論ではなく、情報学の分野の連携の中で、十分実現可能と考えている。

三　ちいさなアーカイブズ

武田家アーカイブズ

ここまで、建築アーカイブズの現状を紹介してきた。これらの活動については、すでにご存知の方もいるかも知れない。次に、「岩手県紫波町　武田家アーカイブズ」を紹介させていただきたい。恐縮ながら、筆者が本稿執筆

写真2　右手の突き出した部分が馬屋。奥は住居空間となっている。（筆者撮影）

にあたり、このように名付けさせて頂いた。武田家は、岩手県紫波郡紫波町に建つ、武田氏の住まう民家である。このアーカイブズは、一軒の民家と、その家に残されている資料により構成される。しかし、あえて本稿では他と同様に、アーカイブズと呼ばせていただく。

なぜここで、仰々しく〝アーカイブズ〟という言葉を用いたのか。それは、当主また地域の有志の、残そうという意思が明瞭だからである。武田家は、築二五〇年の民家であり、同地域に特有の「南部曲り家」の形式をもつ。南部曲り家とは、住居と馬屋が、くの字型にくっつけて建てられている形式を持つ民家をいう。冬の厳しい季節に、外に出ること無く、馬の世話ができることを目的とした形式である。現在でも、紫波郡周辺には多くの曲り家が残っているが、そのなかでも特に規模が大きく、茅葺きを維持しているなど、歴史的な形式を未だに良く残しているものとして、紫波町の指定文化財となっている。町の指定は受けているものの、日常の維持管理は、武田家と、有志の守る会によって行われている。二〇〇〇年

代には茅葺きの吹き替え、また二〇一二年には土壁の大修理と、活発な維持管理を、公的な資金に頼り過ぎること無く行ってきた。現在は、観光向けに、内部公開はしているものの、住居としても利用し続けており、その点で生きている文化財といってよい。

また、文化財的価値の高い建造物とともに、武田家ゆかりの品が多く残され、保管されている。たとえば、古文書や民具、先祖の利用していた昔の教科書や雑誌などである。紫波町の地主でもあった武田家に残るこれらの資料は、同時に貴重な郷土資料でもある。これら資料は、武田家の場合、幸い、既に資料リストの作成と資料評価が、有志により行われたとのことである。しかしながら、その維持管理は武田家の当主に任されているのが現状だ。[20]

現在、古民具は、土壁の改修に伴い、元養豚場を利用して保管されている。その数は、膨大だ。筆者も二〇一二年冬にも訪れたが、生活用具から農耕具まで、その内容は幅広い。唐箕、糸車、竹籠、笠、樽…と、大きな養豚場の屋内に、ところ狭しと並べられている姿は圧巻である。

資料の価値付けは誰がするのか

武田家のようなちいさなアーカイブズの場合、個人に資料の継承を求めることとなり、これは経済的、肉体的にも負担が大きい。特に歴史的建造物の継承には、メンテナンスに多額の費用がかかる。こうした郷土資料などは、特殊な例を除き、地域内での価値共有は出来たとしても、ひろくその価値が認められるケースは少ない。そのため、公的な補助金はなかなか期待することは難しいのが実情であろう。

また、資料を守るためにアーカイブズを設立する場合、資料の維持管理と費用の面から、その管理能力には限界がある。その際、行われるのが「取捨選択」（これをアーカイブズの用語では「評価・選別」という）である。資

写真 3　元養豚場に収蔵された民具の数々。さまざまな民具が所狭しと置かれている。（筆者撮影）

写真 4　馬屋を展示スペースとして使っていた。現在は、土壁の塗り替えにより展示はされていない。（写真は 2010 年夏　撮影：御船達雄）

料の中から、保存すべき資料、また保存する必要性が低いと判断されたものは廃棄される可能性すら待ち受けているのだ。アーカイブズでは日常的に行われる行為であり、大量の資料を、的確に選別するためにマニュアルを作成するなど、その規準を明確化している。[21]

こうしたマニュアル作成の背景には、資料の価値判断が難しいことが挙げられる。こうしたマニュアルの作成無しに、価値判断の基準をアーキビストのみに委ねることにより生じる、損失を避ける狙いがある。

各分野で活発化しつつあるアーカイブズの設立において、武田家アーカイブズのような、価値共有できる範囲の狭い資料は、その流れに置いていかれがちだ。

こうした諸所の問題を解決することなしには、積極的なアーカイブズの運動によっても、全国的な広がりをもった活動へは展開して行かないと考える。地域資料の価値は、アーキビストによる価値判断を超えたところに存在する場合もある。地域の歴史を雄弁に語り、そこに住まう人々の出自をつかさどる点で、うかがい知れない価値をもっている。取捨選択の方法を検討する一方で、取捨選択をしない方法を、アーカイブズは常に模索すべきであるのではないだろうか。

四　自律分散システムによる建築アーカイブズの可能性

アーカイブズにおける、保管場所と価値観の問題、この両者は相反する問題ではない。その解決のために、筆者は「自律分散システムによる建築アーカイブズ」を提案したい。

自律分散システムとは何か

「自律分散システム」とは、東京工業大学教授の森欣司氏により一九九七年に考案された情報システム概念である。このシステムについて、少し説明を加える。この概念の提案以前、コンピュータ同士の連携システムは、中央コンピュータがシステム全体を統括する「集中型」をとるものが主流であった。自律分散システムは、この考え方を覆すものであった。それは、各コンピュータのシステムをサブシステム化し、それぞれが自律的な動き方をしてよいというものである。そして、それらが全体として協調することにより、全体のシステムを構築するという画期的なものであった。つまり、システムのどこにも「中央」を持たず、サブシステムは自律的な動きをするが、それらが結果として全体性をもつという逆転の発想をもつものである。この発想は、生命体と細胞との関係性をアナロジーとして提案されたものだ。細胞は生まれたときは特定の機能を持ってない。細胞は、その場の状況に応じて自律的に形態を変化させ役割をかえる。その結果、細胞の集積体として生命体を構成する。

自律分散システムはこれを参考にして考案された。このシステムにおける、サブセットはすべて平等であり、それぞれ自律的に動くことを許されている。しかし、サブセット同士は協調しており、結果としてシステム全体を構築するのである。この概念は、コンピュータシステムの構築のみならず、他領域においても受け入れられ、その後生産管理などのシステムにも応用された。実は我々も普段、このシステムの恩恵を授かっている。それが、鉄道輸送管理システムである。東京にはりめぐらされた一九の路線が、東京圏輸送管理システム、通称ATOS（Autonomous decentralized Transport Operation control System）と呼ばれるシステムにより、日々管理されている。[22] このシステムにより、突然の事故の際も、ホームにいても電光掲示板から、最新の状況が把握できるようになった。これは、それまで「線区」ごとに司令室を設けて列車の運行管理をしていたシステムを、その単位を「駅」ごとにした。「線区」

から「駅」へと、システムの単位を変えたことにより、収集できる情報量と処理能力がぐっと上がり、列車ごとの状況を常に把握することを可能にした。

さらに、このシステムのメリットとなるのが、導入のしやすさである。上述のように、このシステムは駅単位で自律している。そのため、システムの構築が可能な駅から、徐々にシステムをスタートさせることができる。これは、一度にシステムを組み立てる必要が無い点において、導入時における費用的負担も少なく済む。このように、自律分散システムには完成形が最初に求められていない点も、大きな特徴のひとつである。

アーカイブズへの適用

自律分散システムが、アーカイブズの統合に有効で、これまで述べた諸問題を解決しうる可能性を持つかについて述べたい。

まず、それぞれのアーカイブズは、自律分散システムにおけるサブセットの役割を担う。既存のアーカイブズは、扱う資料形態が文書・写真と異なると、管理組織が独自の方法を構築している場合が多い。これらは、資料や組織状況に応じて効率の良い方法が模索され生み出されたものである。データベースの項目は、最低限の情報が記された「Index」や、さらなる情報を付与する「Inventory」、また資料のコンディション等が記載される「Finding Aid」などにおおきく分けられる。大規模な組織であれば、これらの項目内容が充実したデータベースを作成することもできるだろう。一方、地方の資料館などでは、人手不足により、資料の安全な管理が最優先事項となり、検索手段に必要不可欠な「Index」のみの簡単なデータベース整備にとどまってしまうこともあるだろう。

また、東日本大震災に際して、被災地各地で行われた文化財レスキューでの現場では、独自フォーマットのカル

文化財レスキュー カルテ（石巻市鮎川収蔵庫）

☐ 写真撮影　☐ データベース登録
☐ 写真添付

作業番号 ☐☐☐ - ☐☐

現状

付け札の有無　☐ 有（No.　　/名称　　）　☐ 無
墨書の有無　☐ 有　☐ 無

《材質》　☐ 単体　☐ 複合体

01. 金属（鉄・銅・アルミ・合金・その他　　）
02. 植物（樹皮・ワラ・竹・その他　　）
03. 木
04. 紙
05. 糸
06. 布
07. うるし
08. ガラス
09. 陶器・磁器
0. その他（　　）

《点検結果》

01. 塩害
02. カビの発生
03. 虫害
04. ドロ・砂・ほこりの付着
05. 破損
06. 変形
07. 腐食・錆
08. 剥離
09. その他（　　）

《備考》

日付（20　.　.　）　指示者（　　）

処置内容

水による洗浄　☐ 有　☐ 無

日付（20　.　.　）　処理担当者（　　）

日付（20　.　.　）　処理担当者（　　）

処置後の状態

一次洗浄による状態の変化　☐ 有　☐ 無

二次洗浄の必要　☐ 有　☐ 無

保管場所（収蔵庫・6号館・その他　　）　日付（20　.　.　）　担当者（　　）

東北学院大学博物館

図1　東北学院大学の文化財レスキューで作成しているカルテ

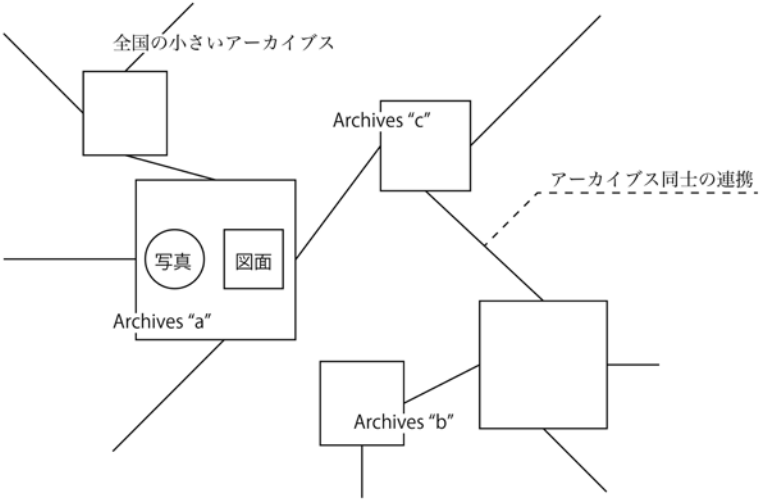


図2　自律分散システムにより建築アーカイブズ（筆者作成）

テが用いられていた。東北学院大学がおこなっている石巻市鮎川収蔵庫のレスキュー事例においては、全ての資料に対してこのカルテを作成する。これには「現状」「処置内容」「処置後の状態」の三点に絞られている。これは、日々変化する被災資料の状態を、安定状態にすることが最優先事項としてされているからであり、「Finding Aid」の記入を優先としたものだ。

様々なフォーマットをもったデータベースの乱立は、フォーマットを統一化する世界的な動きと逆行するように見えるかもしれない。しかし、こうした組織ごとのフォーマットの違いが、現場にとっては理にかなったものとなっている点にも留意したい。これら既存のやり方を、自律分散システムのサブセットとして捉え直せば、資料を最優先とした自律的取り組みとして評価すべき点も多い。

異種のデータベースを統合する

一方、こうした管理組織ごとにデータベースが独立していることは、外部利用者からみれば「検索窓」の違いとし

て現れる。横断的な検索が出来ないことは、貴重な文化資源の活用の機会を減らしてしまう直接的な要因である。こうした問題に対して取り組んでいるアーカイブズが既に存在する。二〇〇一年、国立公文書館は、日本とアジアとの関係に関わる歴史資料のウェブ公開を目指すため「アジア歴史資料センター」を設立した。その後、「国立公文書館」「外務省外交史料館」「防衛省防衛研究所戦史研究センター」の三館のデジタルアーカイブズを、ウェブ上で誰でも横断的に検索出来るようにした。またサイト上では、デジタルアーカイブズを利用した「インターネット特別展」を展開するなど、その活用にも力をいれている好例である。こうした連携の恩恵は大きいものだ。

こうした場面においても、自律分散システムの概念は有効である。先のATOSの事例からも分かるように、このシステムでは、完成形が先に確立されている必要がない。アーカイブズの運用の中での変化に対し、寛容なシステムである。しかし、ここまでサブセット化された自律的なアーカイブズの説明しか述べてこなかった。当然、本稿の目的でもある統合には、それらが独立していただけでは元も子もない。そこで、次に必要となるのが、連携方法である。

アーカイブズにおけるデータの連携と、自律的なデータベースの独自性を尊重することとは、一見矛盾することに感じられるかもしれない。しかし、これまでのデータベース概念をも変える概念が、近年、ウェブの分野で始まっている。それが、LOD（Linked Open Data）である。現時点では、建築アーカイブズのLODへの取り組みは行われておらず、筆者自身も研究の最中である。しかし、自律分散システムのアーカイブズが十分実現可能であることを示したく、紹介をおこなう。

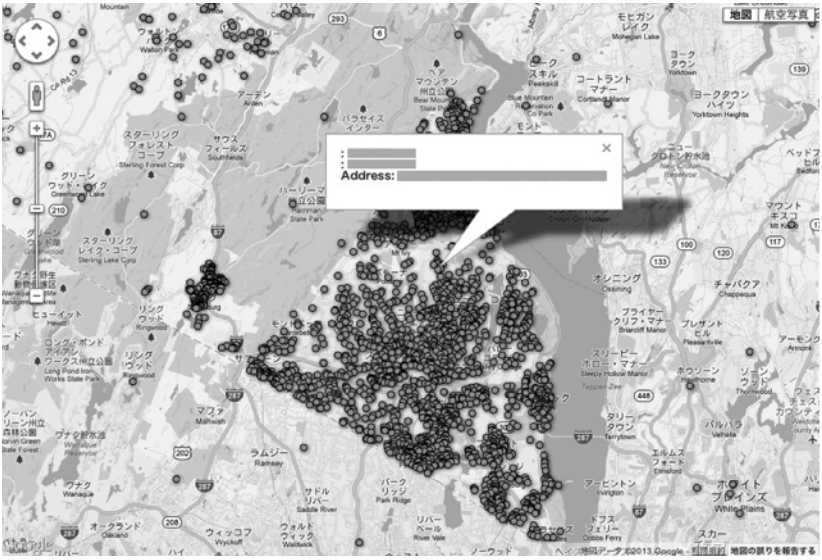


図 3　奇しくも、本稿執筆中に Open Data を利用した世界的なニュースがおきた。2012 年にアメリカでおきた銃乱射事件に際して、とある新聞社が銃所有者の居住地を地図で表示したというものである。このような地図を利用した位置情報の可視化は大きなインパクトをもつ。（作成：The Journal News　地図著作権：Google）

Linked Open Data

Linked Open Data の生みの親は、われわれが毎日のように接している World Wide Web（WWW）を考案し、HTML[23] の設計を手がけたティム・バーナーズ＝リー（Sir Timothy John Berners-Lee）である。今やウェブ上には、企業ページ、ショッピングサイト、ニュースサイトから掲示板、SNS にいたるまで、ありとあらゆる情報がうみ出される。こうした情報は普段我々が目にしているように、「文章」の形式をとり、我々はそれを「読む」ことにより情報を得る。つまり言い換えれば、サイトの情報は、人の読み取る能力に理解を委ねている。そのため、知能をもたないコンピュータは、その意味を理解することが出来ない。サイトを検索していて、同名の全く関係ない事柄がヒットしてしまう場面は、だれしも心当たりがあるのではないだろうか。つまり、そこで、「文章」に登場する人名や場所名、価格などの情報にひとつひと

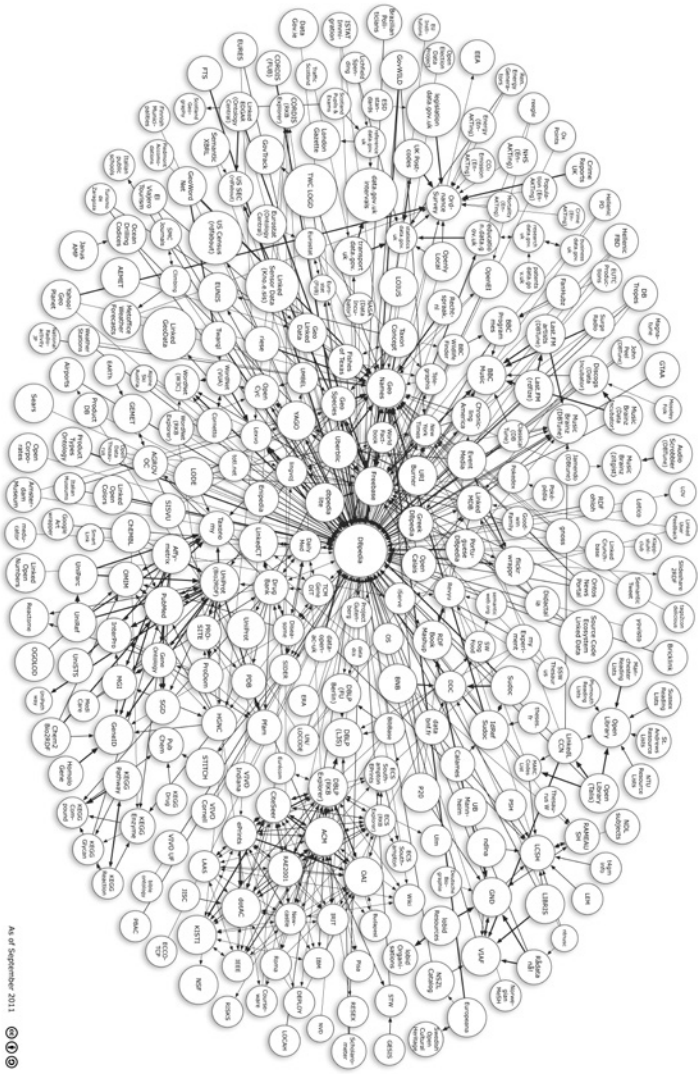


図 4　The Linking Open Data cloud diagram
この図版が示すように、LOD はどこにも中心がおかれていない。矢印の連関のなかで、情報の価値が位置づけられ、すべては等価にあつかわれている。アーカイブスは、このノードひとつひとつとして当てはめることができる。（Linking Open Data cloud diagram, by Richard Cyganiak and Anja Jentzsch. http://lod-cloud.net/）

つ意味付けをし、それを最小単位の「データ」として扱うというのが、「セマンティック・ウェブ」という新しいシステムである。さらには、これら意味づけされた情報は、ちょうど wikipedia のように互いに関係性を持っている。こうした手法を総称して Linked Open Data とと呼ぶ（http://www.w3.org/DesignIssues/LinkedData.html）。ここで重要なことは、ただ単にウェブ上にデータを公開するだけではなく、個々の言葉が意味付けされ、また別の情報と結びついている点にある。この Linked Open Data は、二〇〇九年に海外のプレゼンテーション番組 TED（Technology Entertainment Design）で紹介され一躍脚光を浴びた[24]。

これまでアーカイブズが作成してきたデータベースの情報を、こうした Open Data の形式にすることは難しいことではない。データを公開することに憂慮する方もいるかも知れない。しかし、科学データをオープンアクセスにすべきという議論は、半世紀まえからあり、その必要性が叫ばれている[25]。また、昨今ではアメリカやイギリスを初めとした政府が、統計情報等をオープンデータとして公開している。日本でも、鯖江市が「データシティさばえ」を政府に先駆けおこなっている。

アーカイブズは、こうした生のデータを提供できる貴重な情報源である。資料は、各アーカイブズで保持しつつ、所有物に関わるデータのみ提供する。そして、アーカイブズ同士の情報を、連携させることにより、双方のデータベースを豊かにする。

以上までで、自律分散システムの、アーカイブズへの適用可能性を示した。分散させることにより、一つのアーカイブズにおいて管理すべき資料の量を減らすことを可能にする。これは取捨選択を免れることができる。また、資料を大きく移動させることもなくなることは、地域にあることの価値を保持することも可能としている。また、アーカイブズの基本である「出所原則[26]」の観点からも有効である。

特に、建築アーカイブズにおいては、建築物そのものもアーカイブズの対象にできる。日本には、文化財建造物や伝統的建造物群保存地区のように、公的資金により維持管理されている建築物が全国に多数存在する。また武田家のように、住民の手により守られているものもある。こうした移動することが実質不可能な「建築物」もアーカイブズの一つとして登録可能である状態を生み出すことが出来る。

五　異種のデータが組み合わさる

分野をこえたデータのやり取りは、資料に新たな価値を付加する可能性を持つ。これまで筆者が取り組んできた研究を紹介したい。いずれも、異分野資料を組み合わせ、新たな資料価値を創出したものである。

1　新聞記事を利用したJubiläumsausstellung（1897）の復元[27]

グスタフ・クリムト（Gustav Klimt, 1862-1918）や、フーゴ・フォン・ホーフマンスタール（Hugo von Hofmannsthal, 1874-1929）、彼らの活動は「世紀末芸術」という言葉で表現され、いまなおその作品は世界的に評価が高い。その活動の舞台となったオーストリアのウィーンにおいて、記念すべき展示会が行われた。それが、Jubiläumsausstellung（皇帝即位五十周年記念展示会　1897）である。これは、当時の皇帝　フランツ・ヨーゼフⅠ世（Franz Joseph I., 1830-1916）の即位五十周年を祝ったもので、オーストリア全土から、最先端の工業製品、工芸品が集められた。また、生活用品から、軍事用品、ワイン、子供の遊びにいたるまで、ありとあらゆる最新の流行が発信された。本研究は、この展示会を復元することにより、19世紀末ウィーンにおける産業の動向を、具体性を

もって明らかにすることを目的とした。

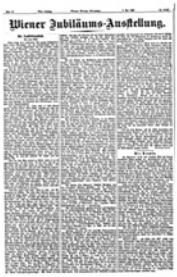
方法

本展示会に関しては、絵葉書や写真、絵画などが多く残されているため、その雰囲気は現代においても、うかがい知ることができる。今回の研究では、それらの資料に加えて、展示期間中の「新聞」に着目し、整理を行った。新聞を資料として用いることで、イベントや入場者数、また様々な事件など、写真等から分析できる表層的な分析以上の情報を加えることができる。

対象としたのは、当時ウィーンで一般に発行されていた日刊紙二〇紙と週刊誌二五紙である。これら新聞資料の閲覧に用いたのがANNO（AustriaN Newspaper Online）である。これは、ウィーン国立図書館が整備している、デジタルアーカイブズであり、全世界から誰でも閲覧可能である。もっとも古いものは1568年から、著作権の切れる七〇年前までの新聞の全ページのデジタルデータを公開している。

新聞分析

展示会の開会した一八九八年五月六日から二週間の新聞をすべて確認し、詳細な分析を行う新聞を選定した。その結果、全四五紙の中から、展示会に関する連載記事を持つ、Das Vaterland（祖国）・Reichpost（帝国便）・WinerZeitung・Neue Freie Presse・Winer Bilder の五紙を選出した。これらの連載記事を会期終了まで、その内容を整理した。図5に、Neue Freie Presse の連載記事について紹介する。



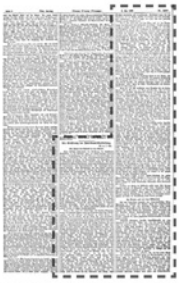
→ 特集記事の執筆者一覧

Neue Freie Presse (1898. 5. 8)
page.16

Winer Jubiläums-Ausstellung.

毎週日曜日のみの特集記事。全９回掲載された。執筆者は右表の通り。ロースもここに寄稿し、その文は常に最初に掲載された。著者ごとに、展示会の各エリアについての執筆担当が決まっている。

特集記事は 1898 年７月３日に終了するが、その後 1898 年９月４日から 11 月 27 日までの日曜日、「Kleine Chronik.（小話欄）」に単発で記事が掲載されたり、連載「Die Jubiläums-Ausstellung」の中で記事が掲載されるようになった。



Neue Freie Presse (1898. 5. 8)
page.6

Kleine Chronik. 内
Die Jubiläums-Ausstellung.

「Kleine Chronik.（小話欄）」内に掲載。ほぼ毎日掲載され、多い時は朝夕刊の両方に存在する。入場者数やイベント、皇帝の展示会視察の様子について報告される。

日付	原題と邦題	筆者
05.08	Die Ausstellungstadt. （Der neur Styl.） 展示の街　〈新しい様式〉	Adolph Loos
	Die Urania. ウラニア	Dr. Ludwig Karell
	Die "Avenue Ernährung". 食物通り	M
	Bosnisch-herzegowinisch Ausstellung. ボスニア・ヘルツェゴビナ展	-
05.15	Der Silberhof und seine Nachbarschaft. ジルバーホフとその界隈	Adolph Loos
	Wien und seine Entwicklung.(Pavillon der Stadt Wien. Pavillon der Stadterweiterung.） ウィーンとその開発（都市再開発委員会館）	
	Das landwirtschaftliche Schulbuch auf der Jubiläums-Ausstellung Wien 1898. 1898年ウィーン記念展の農業教科書	Professor Guido Krafft
05.22	Die Herrenmode. メンズモード	Adolf Loos
	Brot und Salz der Jubiläums-Ausstellung. 記念展のパンと塩	Dr. Ludwig Karell
	Wohlfahrt. 福祉	e.v.z
	Der Verkehr zur Ausstellung. 交通の展示	-
05.29	Der neue Stil und die Bronze-Industrie. 新様式とブロンズ産業	Adolf Loos
	Die Jugendhalle. 青年館	Dr. Ludwig Karell
	Bildung. 教育	E.V.Z
06.05	Interieurs.（Ein Präludium.） インテリア	Adolf Loos
	Das Irrenwesen Oesterreichs in der Wohlfahrtausstellung.（Von Professor Dr. Heinrich Dberfteiner.） 福祉展示におけるオーストリアの誤解を招くような性質 〈Heinrich Dberfteiner教授〉	Dr. Heinrich Dberfteiner
	Das "Urania" -Theater. ウラニア劇場	Dr. Ludwig Karell
06.12	Die Interrieurs in ser Rotunde. ロトンダにおけるインテリア	Adolf Loos
	Volkswohnungen. 庶民の住居	E.V.Z.
	Von der internationalen landwirthschaftlichen Maschinen-Ausstellung. 国際的な科学的農業機械の展示	Professor Guido Krafft
06.19	Die Sitzmöbel. 椅子について	Adolf Loos
	Amusder aschinenhalle.（Von Professor v.Rabinger.） 機械会館から〈v.Rabinger教授〉	v.Rabinger
	1848 bis 1898 im Pavilion der Erzherzog friedrich'schen Kammer Teschen. 1848-98年のパビリオンでのフリードリヒ大公のTeschenの小部屋	Professor Guido Krafft
	Die Postausstellung. 郵便展示	-
06.26	Glas und Ton. グラスと陶土	Adolf Loos
	Volksschulwesen. 国民の教育制度	E.V.Z.
	Milch und Honig ミルクと蜂蜜	Dr. Ludwig Karell
	Die Thiermedicin in der landwirthschaftlichen Ausstellung. 科学的農業？展示の獣医学	J.S.
07.03	Das Luxusfuhrwerk. 豪華な馬車	Adolf Loos
	Chemische Industrie. 化学産業	Dr. Ludwig Karell
	Culturetechnik. 開墾技術／文化技術	Professor Guido Krafft

"Winer Jubiläums-Ausstellung." 特集記事における執筆者一覧

図５　Neue Freie Presse における連載記事（筆者作成）

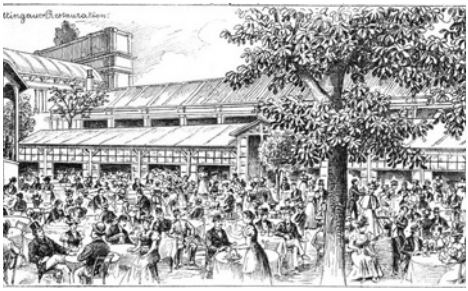


写真5　Wiener Bilder （1898年6月1日発行）より

新聞記事からの情報抽出

新聞記事の情報を統合整理し、これまで判明してきたイメージ資料との照合を行った。ここでは、その一例として、「赤ワインの試飲会」に関する記事を紹介する。

建築家フェルステル設計の赤ワイン試飲パヴィリオンがある。

→ Wiener Zeitung 一八九八年六月六日

フードホールには、ウィーンのすべての醸造協会や、その周りには醸造所に属する酒場があった。北側の通りでは、ワインの試飲会場と、ビール会場、農林部門の展示、青年館がある。

→ Neue Freie Presse 一八九八年六月一二日

食べ物通りでは、アウグスト・ブルックナーというチロルのワイン業者が観衆の注目をあつめている。アカデミックな画家、カール・ハンケがメラーノ地方の風景画を描き、大きな効果を生んでいる。マグバレーナ、ライバッハ、ロイツ、セント・ジャスティンなど各地のワインを一度に飲める機会などそうそうない。だから、この展示会を訪れる人々は、これらの素晴らしいワインを学ぶ機会として利用している。

→ Wiener Bilder 一八九八年六月五日

このように、赤ワインの試飲場に関しても、三紙から情報をみつけることができた。

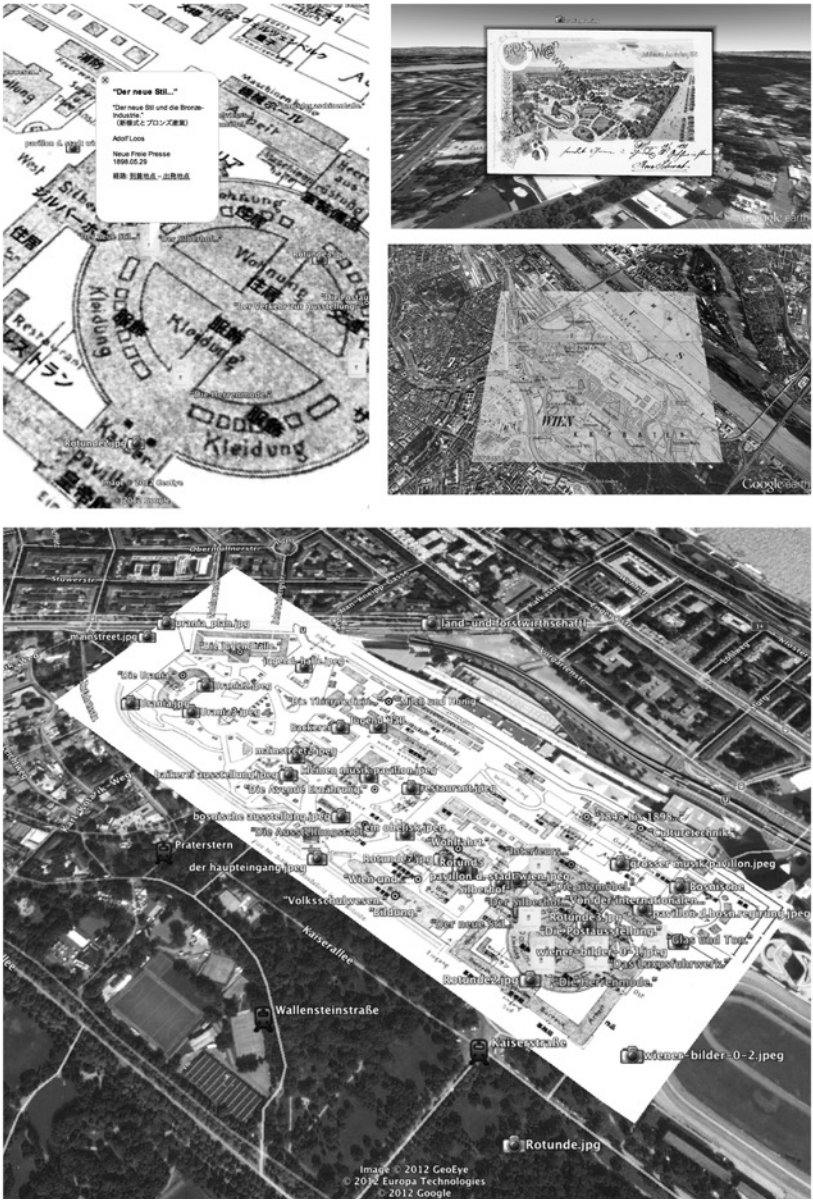


図 6　Jubiläumsausstellung（1897）の復元。それぞれの情報には位置情報が付与されている。（筆者作成　画像等著作権は既に消滅）

情報の整理と蓄積

研究のまとめとして、これまで知られていた絵葉書・写真・絵画に、新聞で得た情報を加え、それら資料の関連付けを行った。その情報の蓄積に利用したのが、「位置情報」である。展示会が行われた場所の、現在の位置を特定し、各資料の緯度経度の情報を足した。また、展示会場を写した写真や絵画に関しては、その描写の方向まで正確に割り出し、展示会の風景を疑似体験できるまでにすることが出来た。

この研究の成果により、同時代にウィーンで活躍をしていた建築家アドルフ・ロースという人物の足跡を明らかにすることができた[28]。ロースは、生前二冊の著作集を発刊していた。この著作集のなかで、ロースが論稿の対象としたテーマは、「ブロンズ産業」「椅子」「馬車」「ガラス」「配管」…と様々であった。こうしたテーマの幅広さは、これまでロースの趣向による部分が大きいと考えられていた。しかし、今回の展覧会の復元により、彼がこの会場内のメイン会場でもあった、ロトンダ展示会場を歩きながら、その論稿を執筆していたことが展示構成の比較から明らかとなった。こうした副次的成果物によっても、新聞資料もまた、時として建築史の資料となることを示し得た。

2　映像資料の建築資料的価値の抽出[29]

NHK教育「テレビの旅」を事例として

建築資料としての「映像」の可能性を探った。建築資料としての映像資料は、近年、大手ゼネコンが撮りためてきた施工風景を収めた映像の存在が広く認知されはじめ、その価値が見出されるなどの動きがあった[30]。これらは建築に関する情報を残すという本来の目的を再発見したものである。本研究において、筆者が対象とした資料は、本

来建築を映すという目的を持っていない映像である。こうした映像群から、建築アーカイブ的見地から、その価値を再発見することで、建築資料として定義しうる境界を探るものである。

NHK教育「テレビの旅」

研究対象としたコンテンツ「テレビの旅」について、紹介したい。「テレビの旅」は、小学校第五学年の社会科教育での利用を目的に制作された映像教材である。すべての放送回がNHKアーカイブズに所蔵されていないため、正確な放送開始日と内容はわからないが、アーカイブズにある、もっとも古い映像としては一九五八年に収録された素材テープがある。いずれにせよ、NHKのテレビ放送開始が、一九五三年であったことを鑑みると、テレビ放送創設期の番組のひとつであったと考えられる。所蔵されている映像は、一九七〇年代を中心とした三一九本である。

この「テレビの旅」は、次のような教育番組として性格を有している。

1、小学校学習指導要領[31]にもとづき、全国の「農業」「水産業」「興業」「伝統産業」、気候や地形といった「国土の特色」を映像の対象としている。

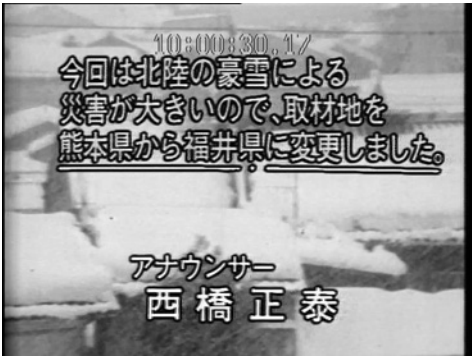
2、指導要領が大前提としてあるため、毎年の同じテーマにそって番組が制作されている。

制作者側の意図

映像を閲覧・整理していくと、「テレビの旅」には、速報性と社会性　二つの特徴が見受けられた。例えば、一九八一年二月一〇日放送の「自然とくらし」では、同年豪雪に見舞われていた福井県敦賀市を放送している。番

組冒頭には、テロップで「今回は北陸の豪雪による災害が大きいので、取材地を熊本県から福井県に変更しました。」と紹介されるなど、制作側の意図を十分に見ることができる。ちなみにこれは、五六豪雪とよばれた、死者一三三人を出した記録的豪雪である。この時に敦賀市で記録した最深積雪量一九六センチメートルは、現在まで同地における歴代一位の記録となっている。

また、日本の工業をテーマとする回では、各地の工業地帯をとり上げることがおおい。そのなかでも、一九八〇年九月三〇日放送「阪神播磨工業地帯」では番組の最後に、工業地帯にのこる海辺で、子どもが遊ぶ様子を映し、「この砂浜はいつまで残されるのだろうか・・・」というテロップで番組を終えている。こうした番組の意図的な演出が、全般的に見受けられるのも、特徴である。



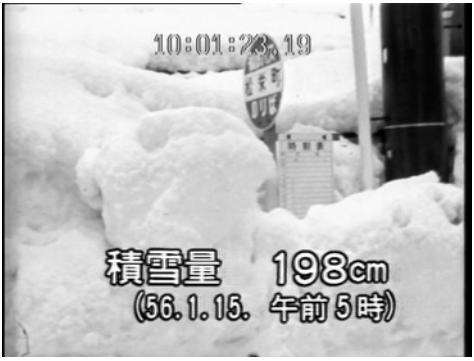


写真6 「自然とくらし」における冒頭部分（以下、「テレビの旅」映像の著作権は日本放送協会）

こうした「テレビの旅」がもっていた速報性・社会性はテレビがもてる強みであり、おなじ教材であれども、教科書とのおおきな違いである。こうした特性をふまえ、「テレビの旅」を「高度経済成長期における国土の変化が、各地に及ぼした微細な変化を記録した資料」として捉え直し、その価値の再発見を行うことと

した。

研究の成果として、この映像の具体的な活用までを提示したいと考え、二〇一一年一〇月「横浜市金沢区の元漁港調査」と、二〇一二年二月「愛知県鍋田新田耐災住居調査」を行った。本稿では、この調査について報告する。

「テレビの旅」活用調査1　横浜市金沢区の元漁港調査

本調査は、以下の映像を利用したものである。

・一九七三年一〇月　一日放送「京浜工業地帯」
・一九七五年一二月一五日放送「横浜港」
・一九七五年　四月二八日放送「日本の国土（3）国土の利用」

映像の内容の一例として、「横浜港」の番組内容を図7に示した。本映像は、かつての横浜港の映像や、船上生活者の艀（はしけ）での生活なども収録されており、都市史の観点から建築資料として価値があると考えた。

これらの映像の収録場所の特定と、現在どのような変化を遂げているのかを調査した。

写真7「阪神播磨工業地帯」におけるエンディング

テレビの旅　―横浜港―

1975 年 12 月 15 日　放送時間：20 分

コンテナの登場によって、必要性がなくなりつつある横浜港の「はしけ」に焦点をあてている。とある「はしけ」の船長に注目して、その船内の生活の映像を収めている。また、横浜港は当時、衰退時期にあったようで、かつて賑わいのあった時代の映像と対比させ、横浜港の盛衰を映像化している。

また、埋立によって海を失った生麦の漁村についても、生活の変化の観点から取材をしている。特に、生麦で最後まで漁師を続けた人物のインタビューを収録している。

横浜港の活気が失われてきている（400ft）

浜小学校分校（507ft）
団地の中に分校が開校するなど、深刻な学校不足。

鶴見区生麦の空撮（537ft）
かつて漁村として賑わった生麦も埋立て等によりその姿をかえた。最後まで漁をつづけた高橋福太郎氏の出漁を収録。

不況で航路が廃止となる客船を見送る映像（677ft）

はしけと貨物船（0ft　オープニング）

本牧ふ頭でのはしけ積荷降ろし作業（40ft）
映像の主体である玉川丸船長石川進氏は、今年ではしけの仕事をやめる。そのため、船の焼却費用を賄うために最後の仕事をしている。

コンテナの出現（111ft）
これまで何時間とかかっていた仕事が一人のオペレーターですぐ出来てしまう。

横浜の町は、トラックの排ガスでいっぱいになっている（174ft）

横浜のはしけだまり（211ft）
はしけの上で生活する人たちが収録されている。また、はしけが放棄され海をせまくしている。

図 7　テレビの旅―横浜港―の番組構成（筆者作成）

調査地1　漁師たちのゴルフ場

やはり京浜工業地帯の拡張工事で、漁場が埋め立てとなった。転業を余儀なくされ、陸に上がった。河童が陸に上がったということで生業にも限界がある。そこで、漁師が共同出資を行なって、ひとつやってみようということになった。

「京浜工業地帯」より

まず、場所特定の足がかりとしたのは、元船着場であったという情報と、もちろんゴルフ場である。現存しているか不明ではあったが、これらの条件をもとに、地図をみていくとコンビナート中に、「川崎ゴルフセンター」の文字を発見した。経営者を調べてみると「川崎共同開発」とあり、その字面からも可能性の高さをうかがわせる。

さて、調査地を訪問してみると、その場所には賑わう打ちっぱなし場があった。埋め立てにより内陸化した土地ではあったが、このゴルフ場の部分にだけ海と接するわずかな水路ができているのを発見した。工場に囲われたその水路には、釣り船が停泊しており、異様な雰囲気となっていた。漁港はゴルフ場となり、その名残がコンビナートのなかの、釣り船の停泊地として今なおのこっているのである。

調査地2　漁村・生麦

港の周囲は、京浜工業地帯の心臓部ですが、工場密集地帯の真ん中に位置する生麦には最後まで魚を獲り続けた漁村がある。3年前の生麦の濱には、漁村がいくつも並んでいた。高橋福太郎さんはたったひとり漁業を続けた。大型タンカーの隙間をぬって、綱渡りの出漁を毎晩繰り返していた。今でも時々、思いがけない大漁の

写真 8　川崎ゴルフセンター

写真 9　ゴルフセンターの向かいに広がる海。コンビナート内に、残る漁船

写真 10　間口を狭くする漁村の典型。写真向かって左側が、埋立地。以前は、海に接していたのであろう。

よろこびの夢をみる。

「横浜港」より

生麦とは、鶴見川から海へとそそぐ、河口に面する町である。一般的には、生麦事件の舞台としても有名だ。航空写真でみると、町割が漁村の典型的な漁村の形式をとっている。堤防で分断はされてはいるものの、たしかに堤防沿いには漁船がならんでいる。海岸線の痕跡をさがしに調査にむかった。

住宅地の一歩なかに入ると、無舗装の道があった。最初は何気なく歩いていたが、道が白っぽい。そんなとき、ふと貝殻が目に入った。この白い道は、貝殻の破片であったのだ。さらに奥へと歩いていくと、波板をはった民家があった。どうも家の一部を壊し、その面に補修で貼ったもののようだ。想像でしかないが、海側に面した謎の痕跡は、船小屋の跡ではないだろうか。家と海とは、堤防で分断され、堤防の内側にのこってしまった、不要な船小屋をとり壊し、駐車場としてしまったのだろう。

写真 11　未舗装の道にみつけた貝殻

写真 12　波板でおおわれた部分は、舟屋あとでは無いだろうか

かつて生活を支えていた漁船は、車に置き換わり、陸の仕事場へと向かわせている。

調査地3　富岡町の漁港

私たちは、ダンプカーやブルドーザの行き交う埋立地で小さな漁港を見つけました」人影のすくなく寂しそうな港でした。古くなった小さな船と、わかめの香りが漁港の名残をとどめている。

「日本の国土（3）　国土の利用」より

富岡町であることは、映像から判明していた。しかし現在の富岡町は、すっかり内陸となっており漁港であった面影を感じない。そこで、ふるい航空写真のデータベース[12]を利用して、埋め立てが始まる前の一九四四年の写真を見ることにした。すると、驚くべきことに海岸線が、おおよそ一キロメートル近く内陸にあったことが判明した。さらに時間を進めながら、航空写真を確認していくと、埋め立てがすすんでいく様子がわかってきた。そして、その中に取り残された水辺を発見することができたのである。内陸化されたその水辺にも、一九八三年の写真では、確かに船のようなものが見受けられた。

実際に、訪問してみるとそこは、団地群に囲われた池となっていた。子どもたちが遊ぶ姿に、かつての漁港の名残は見受けられない。しかし、歩いてみれば、たしかに海まで通じる水路がいまだにハッキリと残っていた。

「テレビの旅」活用調査2　耐災住居

本調査は、以下の映像を利用したものである。

・一九六四年六月二九日放送「木曽川　～洪水と農業～」

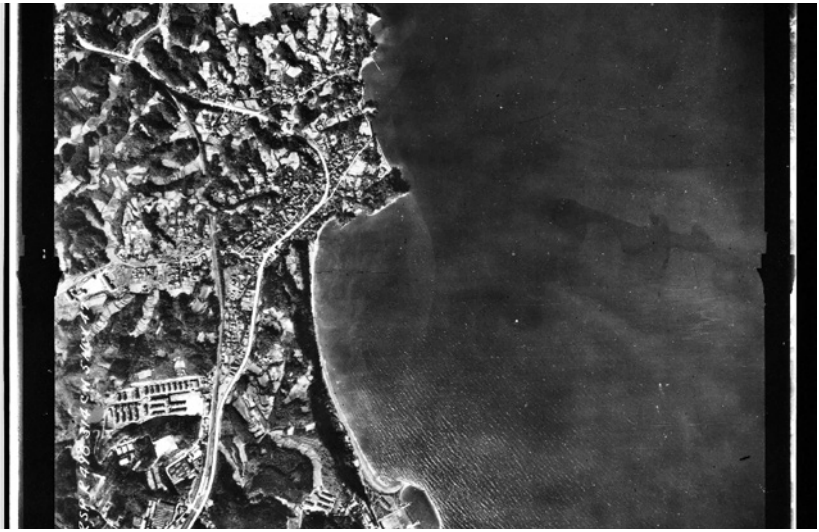


写真 13　1944 年　埋め立てが行われる前の富岡町（国土地理院）

写真 14　1983 年　埋め立て後の富岡町。中央やや西にみえる多角形の池のような部分が、テレビの旅で取り上げられた漁港とかんがえられる。航空写真からも漁船が確認できる。

写真 15　現在の漁港跡。住宅街に囲われた池となっていた。

NHK アーカイブズで閲覧できる、もっとも古い放送が、「木曽川　～洪水と農業～」である。木曽三川により作られた輪中、また洪水時の避難小屋である水屋の紹介など、生活の様子を伝えている。さらには、放送の五年前、一九五九年に紀伊半島・東海地方を襲った、伊勢湾台風に関しての内容も含まれている。死者四六九七人を出した未曾有の大災害は、木曽川の河口に位置する干拓地、愛知県弥富市の鍋田干拓地全域を水没させた。

映像はさらにその復興までを収録している。その中で、興味深いのが、復興住宅として立ち上がった住宅群である。ずらりと並んだ、コンクリートブロックの住宅群は、異様な光景である。調査をおこなうと、愛知県総合教育センターというサイトに若干の記載があり、「耐災住居」と呼ばれていることが判明した。また、同地の研究としては、地理学分野に数件みつかっ

写真 16 「木曽川　～洪水と農業～」に映る耐災住居

た[33]。これらは、集落研究として鍋田干拓地を取り扱っており、伊勢湾台風の被災前後の集落計画についてまとめたものだ。それら研究において、この住宅の設計者と設計背景について、脚註に記されていた箇所があったので以下に引用する。

32）家屋の内部は1階は土間で物置用になつており、2階と3階が生活に用いられる。とくに2階に8畳と4・5畳の寝室、居間その他台所、浴室、便所があつて生活の中心である。3階は3畳の部屋だけで設計書では子供室とされているが水害時の避難室の機能を予想していることは明らかである。玄関は北向きで2階にあり、南面にはテラスが設けられている。全戸が同一規格の家屋をもつにいたつたのは愛知県が東京工大勝田研究室の設計（勝田研究室[34]（1960）：鍋田・碧南・平坂干拓地区入植者災害復旧住宅標準設計図）を「農林干拓協会」に一括請負建築させたからである。こうすれば建築費補助の対象になりやすく、かつ単価が安くなるという利点がある（1戸の建築費は約100万円、その30％が補助金である。）

「愛知県鍋田干拓地の伊勢湾台風被災前後の集落計画」より

伊勢湾台風の復興は、建築史においても大きな意味をもつ事件であった。また、建築学会は一九五九年に「建築防災に関する決議」を建議書として提出するにいたった。また、日本を代表する建築運動であるメタボリズム運動においても、一九六〇年、黒川紀章が愛知県海部郡蟹江町を敷地とした「農村都市計画」を発表するなどした。しかし、これまでこの耐災住居が、取りあつかわれることはなく、歴史に埋もれていた。

史的価値が高いと考え、現存状況の確認とともに、二〇一二年二月調査を行った。調査では、調査当時町会長である加藤一之氏に聞き取りを行い、建設当初は一三六戸で建てられたこと、また現在でも約三〇戸程度の住戸が残存していることが判明した。また、長く人の住んでいない一戸をご紹介いただき、実測調査等を行うことができ

写真 17　調査時に撮影。現存するもので最もオリジナルに近い。奥に見えるのは、耐災住居に増築部分を設けたもの。現存するものも多くは、このように改修されている。

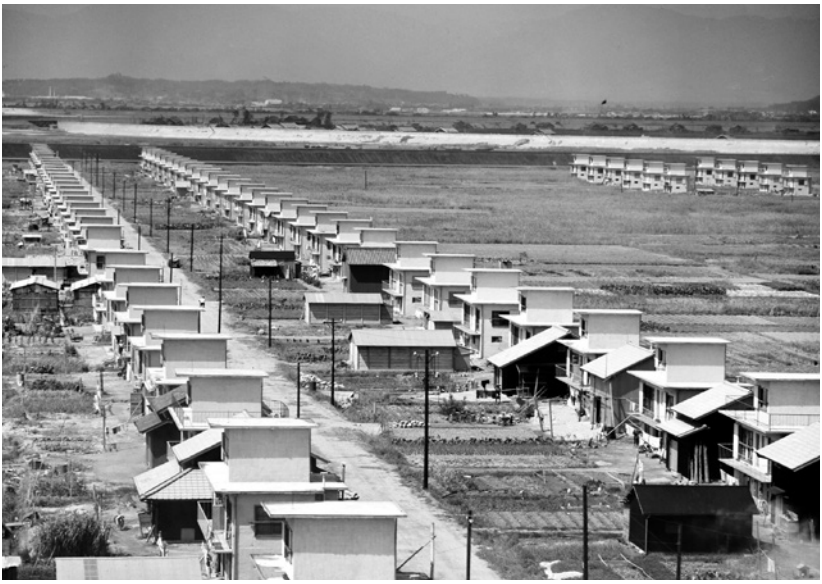


写真 18　鍋田干拓地にたち並ぶ耐災住居（1962 年 9 月 22 日撮影　提供　朝日新聞社）

た[35]。

このように、映像もまた都市史・建築史に新たな側面を照らしだす貴重な資料となりえた。「テレビの旅」がもっていた速報性により、埋め立ての経過が、漁村の変容を映像として残す結果となった。耐災住居のような災害復興の事業は、本来、都市史として残されるべき事業であるが、こうした映像を通して再発見することが出来た意味は大きい。

このように資料は、様々な視点から、その価値を見出される可能性を持つ。しかし、この研究もNHKの協力のもと実現できたものだ。誰もが、こうした新たな発見を行える素地をつくるためには、開かれ、また連関したデータベースの構築が必要である。

六　まとめ

英国図書館と英国情報システム合同委員会は、一九八三年から一九九二年に生まれた若い博士課程の学生、一七〇〇〇人を対象に情報探索行動・研究行動の調査を行った[36]。その結果、研究の資料に、雑誌論文や図書等の刊行された二次資料をもとめる傾向があるというレポートが出された。つまり、一次資料にあたろうとする研究態度がみられないという結果である。あたらしい資料を発見し、その研究を報告することこそ研究者の姿であると考えていた筆者にとっては、衝撃的なレポートであった。

急速なインターネットの普及は、家にいながらにして第一次資料を探すことができるようになるなど、研究の速度を変えた。だれもが、書籍や新聞、写真、ありとあらゆるデジタルアーカイブズに接することが出来る環境にある。

本稿では、建築アーカイブズにおける自律分散システム導入の合理性、またLODの持つ可能性を述べてきた。いずれも、一次資料を守りたい、という思いによる。アーカイブズは、非現用資料の価値に気づいたことから起った。その一方、保管場所の問題にともなう取捨選択とそれは、表裏一体の関係でもあった。LODを用いた自律分散システムの構築は、場所の問題を解決し、また全てのアーカイブズを同列に扱える点において、ちいさなアーカイブズを尊重できる。多くの課題は残してはいることは自負しているが、積極的な提案として寛大に読んでいただけたら幸いである。

「資料の価値は、見る人により変化する」アーカイブズが本当に価値あるものを将来に残せるのか、遠い未来への挑戦を今からはじめていきたい。

註

（1）二〇一三年春に、東京の湯島地方合同庁舎内に開館予定。

（2）一九六〇年、日本で開催された世界デザイン会議を契機に発表された建築家グループ。「建築や都市を成長変化する集合として捉える」という考えをもっていた。「東京計画1960」など、多くの計画が社会に発表された。

（3）森美術館で開催された、メタボリズム運動の紹介を中心とした展覧会（二〇一一年九月一七日～二〇一二年一月一五日）。この展覧会に開催に際しては、東京カテドラル聖マリア大聖堂（丹下健三1964）の建築模型が発見され、また屋外展示された中銀カプセルタワービル（黒川紀章1972）のユニットが埼玉県立近代美術館に恒久展示されることになるなど、建築資料そのものの再評価という意味で、大きな意味を持った。

（4）建築や、工業製品の設計図を作成するために用いるコンピュータソフトウェア。いまや、企業で図面を手で書くことは、ほとんどなくなってしまった。

（5）情報分野における用語で、従来のデータベースでは管理できなかったような、大量のデータ群をさす。日々生成される構造化されていない、多種多様な資料を収集し、解析することにより、マーケティング等に活用しようというものであ

る。このビッグデータの利用により、成功を収めた代表例がGoogleである。

（6） Le Corbusier（訳　吉阪隆正）. 建築をめざして. 鹿島研究所出版会, 1967.

（7） 建築博物館設立要望書. 建築学会. 建築雑誌. 101巻, 1251号. P.92.

（8） 前掲「建築博物館設立要望書」

（9） 中原まり. 小さなことから始めよう（建築博物館が欲しい!). 建築雑誌, 2002, 117巻1482号, p.54.

（10） ニューヨーク公共図書館、スカイスクレーパー・ミュージアム所属（執筆当時）

（11） 日本大学総合科学研究所教授、早稲田大学人間科学研究所特任教授（執筆当時）

（12） 高橋 鷹志. 小さな建築博物館 ― 家（建築博物館が欲しい!). 建築雑誌. 2003, vol. 118, no. 1507, p. 32-33.

（13） 前掲　高橋（2003）

（14） 檜山 未帆. 今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から 設計図に見る歌舞伎座の美学 岡田信一郎・捷五郎建築設計原図集成から. 国立国会図書館月報. 2010, no. 588, p. 2-3.

（15） 前掲　檜山（2010）

（16） 金沢工業大学・建築アーカイヴス研究所. 日本の建築アーカイヴスに適した系統的な資料組織法の構築に関する研究 文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（B). 2012.

（17） 金沢工業大学建築アーカイブズ研究所ホームページより（http://wwwwr.kanazawa-it.ac.jp/archi/katudougaiyou/katudougaiyou.html）

（18） 二〇一〇年夏には、建築学会大会（北陸）において研究集会「近・現代建築のアーカイブズとドキュメンテーションの諸問題」が開催された。

（19） 前掲　金沢工業大学・建築アーカイブズ研究所（2012）

（20） 現当主　武田之成氏への聞き取り調査より（調査日：二〇一二年一二月九日　調査参加者：本橋仁・百野太陽　いずれも早稲田大学）

（21） 国際公文書館会議（International Council on Archives, ICA）では、評価・選別に関するマニュアルのドラフトを公開しているなど、国際的な方法である。

（22） 森欣司. 自律分散システム入門：システムコンセプトから応用技術まで. 森北出版, 2006.

（23） ウェブサイトを表示させるための言語。すべてのサイトは、この言語で表記されている。これは、ティム・バーナーズ＝リーが設立したW3Cという組織により管理されている。

（24） この動画は、ウェブ上でみることができる。　http://www.ted.com/talks/tim_berners_lee_on_the_next_web.html

（25） 一九九五年、国際科学連合評議会は、世界にいくつかのデータセンターをつくることで、データ紛失から守り、またそれらデータへのアクセスは可能にするべきであるとしてい

る。

（26） 出所の違う資料を混同させてはならないという、アーカイブズにおける基本原則。

（27） 本橋仁，原功一，癸生川まどか，齋藤亜紀子，中谷礼仁．「Adolf Loos. Ins Leere Gesprochen. 研究―1 ―新聞記事を利用した皇帝即位50周年記念展示会の復元―」（学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠 2012. pp341-342.2012.）をもとにしている。

（28） 原功一，本橋仁，癸生川まどか，齋藤亜紀子，中谷礼仁．「Adolf Loos. Ins Leere Gesprochen. 研究―2 ―著作第一集と皇帝即位50周年記念展示会の照合分析―」（学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠 2012. pp343-344.2012.）

（29） 本研究は、NHKアーカイブズ　トライアル研究Ⅱ採択課題「建築資料的価値を持った映像資料の発見と活用方法の研究―ＮＨＫ教育「テレビの旅」を一事例として―」をもとにしている。

（30） 特に活発な活動として、「ニッポン建設映像祭」があげられる。

（31） 昭和52年の小学校学習指導要領より。

（32） 国や自治体などが所蔵している航空写真については、「航空写真画像情報所在検索・案内システム」（http://airphoto.gis.go.jp/aplis/Agreement.jsp）により横断的な検索と閲覧が可能である。

（33） 小笠原節夫．愛知県鍋田干拓地の伊勢湾台風被災前後の集落計画．地理学評論．1963,vol. 36, no. 5, p. 267-279.

（34） 「東京工業大学の勝田研究室」という記述から、これら住居の設計者は、当時『コンクリートブロック住宅』や、『コンクリートブロック農村建築』などの著書を執筆していた勝田千利氏であると判断した。
勝田千利．コンクリートブロック住宅．相模書房，1955.
勝田 千利．コンクリートブロック住宅（増補改訂版）．相模書房，1956.
勝田千利．コンクリートブロック農村建築．相模書房，1956.

（35） この耐災住居の調査結果は、別稿にて報告予定。

（36） The results are in: major study into the behavioural habits of the “Generation Y” PhD students released by JISC and the British Library（2012）. このレポートは JISC のサイトで閲覧可能（http://www.jisc.ac.uk/news/stories/2012/06/generationy.aspx）。

What to Call an Architectural Document: Significance and Foresight of Architectural Archives by Autonomous Distributed System

MOTOHASHI Jin

Abstract

This paper is about Architectural Archives by adopting autonomous distributed systems. As one could tell by the fact that a national resource center is being built right now, Architectural Archives is at its major turning point. Architectural documenting has two major problems. One is the variousness of document forms, such as drawings, models, pictures and so on. The other is its enormous volume. Besides, small archives could be missed out by centrally managing the documents. If autonomous distributed system is adopted, the distributed management of documents is possible by dispersing the archives. Regional characteristics of the documents are also protected this way. Also the archives would be interacted by Linked Open Data. This enables all archives to be treated equivalently.

Further more, to show the effectivity of interacted archives of different fields, this paper reports on specific research examples.

・The research of the "Ins Leere Gesprochen"(Adolf Loos, 1921) The restoration of the Jubilaumsausstellung 1898 by Newspaper stories

・A television program, 'Terebi-no-tabi (TV Journey)' by NHK and the extraction of its values as an architectural document.